

サタデー コラム

「転地養蜂」日本列島を縦断

わが国の專業養蜂は、日本列島を南から北へ花を求めて巣箱を移動する形態に特徴があります。転地養蜂といわれ、明治後期から昭和50年代には多くの養蜂家が活躍しました。岐阜は地理的に日本の中心で、転地する際の中間点に当たります。その年の前半に採った蜂蜜や蜜ろうを納め、後半の生産に備え養蜂資材を調達する問屋の集積地でありました。さらに県花がレンゲで、レンゲ蜜はおいしく最高の価格で取引されます。レンゲソウの減少などで、国産蜂蜜の生産量は減っているものの、今でも岐阜の養蜂問屋はわが国において、蜂産品・資材の取扱額、数量ともに最大です。

秋田屋本店社長 中村源次郎氏



なかむら・げんじろう 1951年、岐阜市生まれ。博士(医学)。岐阜南法人会長。県製菓協会会長。県養蜂協議会会長。県養蜂組合連合会会長。岐阜市笑いと感動のまちづくり実行委員会会長。県フエニング協会会長。県立岐阜北高校同窓会長。

岐阜は、西洋ミツバチを飼育する近代養蜂発祥の地で、專業養蜂家を多く輩出し、大きな勢力を誇りました。岐阜市本町出身の專業養蜂家に小生の叔父、中村秋雄がいました。先月他界しましたが、戦後間もなく專業養蜂を志し、90歳まで生涯現役を貫きました。叔父は小生の養蜂の師で、その下で修業させてもらい、養蜂の素晴らしさを教授してくれた恩人です。20歳年上で40代の最盛期には国内最大級の蜂群数を有し、転地養蜂を極めました。

養蜂業では、2月初めの立春を蜂春と呼び、その年のスタートとしています。岐阜で越冬したミツバチを鹿児島へ移動し、蜂を強勢群に仕立て上げます。鹿児島で菜種蜜を採取し、4月末に岐阜のレンゲが満開になるや、全群を岐阜に引き戻し、レンゲの採蜜が始まります。その後、秋田県へ移動し、アカシアの採蜜、6月の下旬には北海道へ渡ります。北海道では旭川から北へ150キロの音威子府に拠点を置き、アザミやシナノキ(菩提樹)の蜜を採ります。8月の旧盆ごろまで採蜜し、11月に雪

がちらつく頃になると、全群を岐阜へ引き揚げ、越冬に入り1年を終えます。海外では定地養蜂が主で、年間を通していろんな花の蜜が入り、採蜜すると既にブレンド状態になっていますが、転地養蜂は単花蜜として採蜜でき、季節ごと、地域ごとの特徴ある蜂蜜を採ることができるため、価値は高くなります。

叔父はミツバチを愛し、生産性向上に尽力しました。蜂群の特性を探索し、緻密に粘り強く飼育法の改善を図り、毎日克明に記録を取り続け、膨大なデータを蓄積しました。残された成果を礎に、さらなる研究を使命と心得、転地養蜂の伝統を継承し、養蜂業の発展に努める所存です。